

# 小児



## コーナー

あじま診療所 所長  
小児科医師  
森 英一



### 「発熱」について

発熱は多くは感染に対するからだの反応なので、熱が高いというだけで脳がやられたり、直接身体に害を与えるということはありません。ただし、髄膜炎や脳炎といった熱の原因が脳に関係するところにあったり、熱中症で体温が42℃を超えるといった異常な高温の場合は除きます。最近ではヒブワクチンや、小児用肺炎球菌ワクチンも打てるようになっており、接種が完了していれば髄膜炎になる危険はかなり減りますので、1才過ぎまでに終わるようにしましょう。かぜで熱が40℃あってその時は顔も赤くてハーハーいつつらそうでも、少し熱が下がって38℃くらいになるといつもほどではないにしても、遊ぼうとしたり、食べたり飲んだりできていればあまり心配はいりません。熱の高さと病気の重症度はかならずしも比例しませんが、長く続く熱は注意が必要です。『「かぜ」でも3、4日（は熱が続く）』という言葉もありますので、長く続く熱で

その原因がはっきりしない時はレントゲンや血液検査が必要になります。

熱が出ている時に冷やした方がいいか、暖めた方がいいかの基本は本人が快適な状態にしてあげることです。熱が上がっていくときは、寒気があるので暖かくしてあげ、熱が上がりがきると暑く感じるので冷やしてあげます。その時の目安としては手足をさわってみて、冷たければまだ熱が上がっていくときなので暖かくしてあげ、手足も熱くなっていけば冷やしてあげます。

解熱剤（熱さましの座薬や頓服）の使用も、病気そのものを治す薬ではないので、子どもの状態で決めて下さい。一応の目安としては38・5℃以上で元気がないときとしています。熱さましには、痛み止めの作用もあり、使って一時的にからだが楽になった時に水分を摂ったり、食べたりできるようになるからです。